

精選 折口信夫  
V

隨想ほか・迢空詩編

折口信夫  
岡野弘彦 編

慶應義塾大学出版会

精選

折口信夫

V

隨想ほか・  
逍空詩編

目次

凡例

零時日記（I）

海道の砂 その一

折口といふ名字

わが子・我が母

留守ごと

細雪以前

茶栗柿譜（抄）

増井の清水の感覺

71

67

59

52

45

37

18

7

6

花幾年

自歌自註 海やまのあひだ（抄）「夜」「島山」

自歌自註 春のことぶれ（抄）「氣多はふりの家」

山の音を聴きながら

招魂の御儀を挙げて

島の青草 沖繩を偲びて

古事記の空 古事記の山

飛鳥をおもふ

春の歌の話

128

116

110

104

99

93

90

77

73

野山の春

鏡花との一夕

寿詞をたてまつる心々

平田国学の伝統

民族教より人類教へ

詩語としての日本語

詩歴一通 私の詩作について

『古代研究』追ひ書き

\*

216

206

186

182

154

142

136

133

民族史觀における他界觀念（草稿）

\*

迢空詩編

解題

先生晩年の歳末・年始

長谷川政春

岡野弘彦

341

334

289

242

迢空詩編

『古代感愛集』抄

追悲荒年歌

ちゝのみの 父は いまさず、  
はゝそばの 母ぞ かなしき。

はらから の我と、 我が姉  
日に 夜に 罷ばえに けり。

怒ります母刀自見れば  
泣き濡れて くどき給へり。

そこゆゑに、 母のかなしさー。

家荒れて 喰ふものはなし。

屋場寒く 鳥もあそばず。

あはれ かの雀の子らは、  
軒の端は ゆ 顔おほさし出いで  
ちゝと鳴き くゞもり鳴きて、  
声やめぬ。ふた声ばかり |

すゞめ子も、餓うゑ寒からむ。

あはれく 喰ふ物やらむを—。

腹はらへりて 我も居にけり。  
頻々しきに いたむ腹はらかも |

晴るゝ日の空の 青みに  
こだまするもの音おともなし。

静かなる村の日ねもす |

村びとも みながら飢ゑて、

ま雇たゞ 寝貪るらむ。

朝明よりものにい行きて、

帰り来し姉のみことの、

我を見て あはれと言の

町人の、姉にくれたる

蕎麦の粉の練れる餅の

焼きもちひ 嘘へと言ひて、我に給<sup>た</sup>びたり。

くるゝ時、我を見し目の

姉が目の、さびしかりしを

髪<sup>おも</sup>髷<sup>かげ</sup>に 今も忘れずー。

ひた喰はゞ 片時の間ぞ |  
喰はざらば 腹ぞ すべなきー。

蕎麦もちひ 惜しみ たしみて、  
ねもごろに 我が喰ひをるに |

ほろくと とすれば崩えて |

もろくづるゝ蕎麦の粉の すべもすべなさ

反  
歌

いとけなくて 我は見にしか。野山にも

交らひ浅き若うどの

群れ

なかくに 鳥けだものは死なずして、餌ゑばみ乏しき山に 声する

家に養ふものは しづかになりにけり。馬すら あしを踏むこともなし

昭和十年七月「短歌研究」第四卷第七号

## 幼き春

わが父にわれは厭はえ、  
我が母は我を愛めず。

兄姉と心を別きて  
いとけなき我を育しぬ。

童にて 我は知りたりー。

まづしかる家の子すらや、  
よき親を持ちてほがらに  
うれしけき日毎遊びに、  
うちあぐる声のたのしさ。

陰深き家の軒べに  
其を見ると えみ居れば、  
おのづから 爪昨はれつゝ。

よき衣を 我は常に著き

赤き帶 高く結びて、

をみな子の如く装ひ

ある我を

子らは嫌ひて、

年おなじ同年輩の輩も

爪彈きしつゝ より来ず。

たゞ一木 辛夷 花咲き

春の日のほろゝに寒き  
家裏の蔵庭に居て、

つれぐと、心疲れに

泣きなむと わがする時—

隣り家と 境ふ裏戸の

木戸の外に人は立たして、

白き手を 婉にふらせり。

我が姉の年より 長けて、  
わが姉と 似てだに見えず |  
うるはしき人の立たして、  
我を見て ほのぐ 爽める |。

しばぐ も わが見しことを—  
今にして 思ひし見れば、  
夢の如 その佛薄れ  
はかなくも なりまさるなり。

もの心つけるはじめに  
現しくも 見にける人—  
年高くなりぬる今し、  
思へども、思ひ見がたく  
いよゝなり行く

反  
歌

春早き辛夷の愁ひ咲きみちて、

たゞに

ひと木は すべなきものを

昭和十二年一月「むらさき」第四卷第一号

千瀬の浪

國<sup>くに</sup>頭<sup>がみ</sup>の辺<sup>へ</sup>戸<sup>ど</sup>のみ崎<sup>さき</sup>に

わが來たり 息づきにけり

國<sup>くに</sup>の秀<sup>ひばり</sup>を遠く來離れ—

人の住むところも見えず—

ひさかたの 空に續きて

洋<sup>わた</sup>の波 青く澄みたり

照れる日に 我は來たりて、

照りあまりけぶる真昼に、